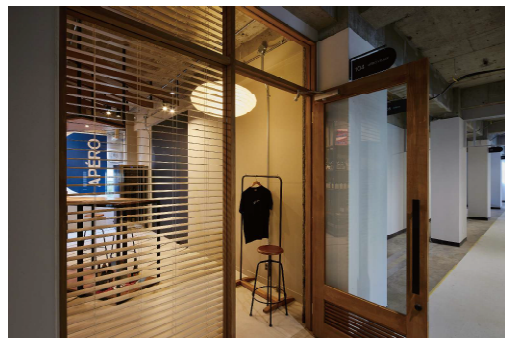
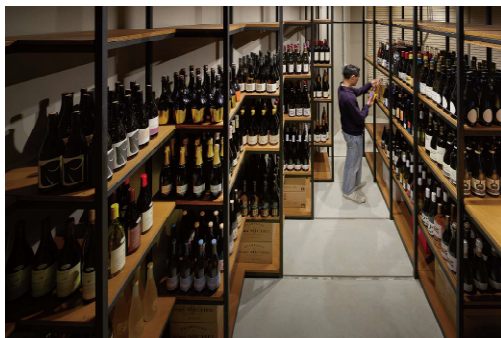




APÉRO VILLAGE

『交流を促すワイン棚』

かつて中学校だった建物を商業施設に改修した「HOME/WORK VILLAGE」。ここに、テナントとして入居するワインショップをデザインした。かつての学びの空間を活用することもあり、単なるワインショップではなく、訪問者がワインについて学べる場も同時に創造することが求められた。

そこでワイン棚を使ってかつての教室を2つの空間に分割し、一つはショップスペース、もう一つはテイastingやワインスクールのためのスペースとすることを考えた。

教室の中央にワイン棚を対角線に配置し、30×30mmの角パイプを骨組みに使用して、600mmピッチのグリッドでワイン棚とハイカウンターを一体的に構成した。これによって、中央のワイン棚を最大化すると共に、空間を緩やかに2分割し、斜めの軸によってダイナミックな空間体験を生む。そこにハイカウンターを組み込むことで、分節された空間は同時に繋ぐことができる。

スクールエリアの壁にはチョークで描けてマグネットも使用可能な黒板塗装を施した。メインのワイン棚は固定家具だが、それとは別に同じデザインで可動のテーブルやベンチも設置し、様々なイベント利用に対応できるフレキシブルな計画になっている。こうして、ワインを通じて人と人が交流できるワインショップが実現された。

所在地	東京都世田谷区
用途	ワインショップ
竣工	2025年7月
規模	31.50 m ²
構造	RC造
階数	地上3階(対象は1階)
施主	apero wineshop
設計	SWAB+MSA Ltd. ※Studio Wasabi Architecture と共同
構造	楠本玄英構造設計事務所(構造アドバイザー)
施工	共和建物管理
撮影	Forward Stroke Inc.
掲載	Pen Online



石神井公園の茶室

『マンションの中の本格茶室』

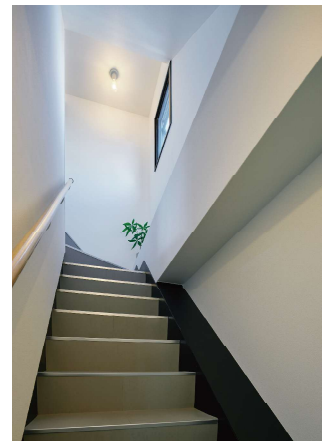
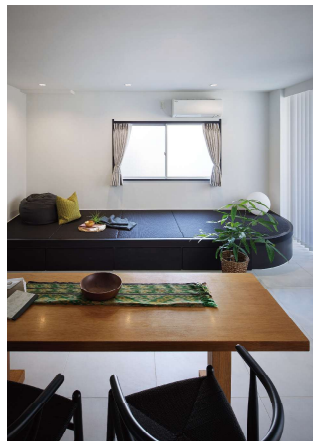
マンション住戸の中に江戸間で四畳半の茶室を設計した。施主は表千家で茶道に親しみ、自宅住み替えのタイミングで住戸内に茶室を設えることにした。求められたのは、お茶会を開ける茶室で、「真・行・草」の設えで言うところの、「行」の設えでありつつ、比較的新しいマンションのインテリアとの調和である。

元々リビングに面した寝室だった部屋の壁と引戸を解体し、サッシやエアコンはそのまま活かしつつ、リビングに対して障子で開いたり閉じたりできる構成の茶室を考えた。障子を閉めれば客間としても使える茶室であり、障子を取り外せばリビングと連続する小上がりの和室となる。また、取り外した障子は行燈照明側の敷居と鴨居に収納しておく事もできる。

茶室には床の間を設え、墨蹟窓を設けた。墨蹟窓は納戸との間の壁に開けられ、墨蹟窓の障子部分の意匠は施主夫婦の家紋をモチーフにデザインされた、施主友人からのプレゼントである。窓枠は竹材の曲げ加工とした。床の間に床脇は設けず、建具受けを兼ねる床柱は杉の面皮柱とした。リビングとの意匠のバランスも考慮し、シンプルで線の少ないデザインを心掛け、落とし掛けは省略し、床框のない踏み込み床とした。

茶室の床下は、納戸から使える収納スペースとし、茶器類を収納することができる。茶室の畳は熊本県産藁床の本畳とし、炉畳には電熱炉を設えた。炉の真上には天井下地を補強した上で釜蛭釘を差し込み、鎖を吊るすことができる。

所在地	東京都練馬区
用途	茶室、住宅（リノベーション）
竣工	2024年4月
規模	87.55 m ²
構造	RC造
階数	-
施工	(株) RINZ
撮影	松井進
掲載	建築ジャーナル、archello



ギャラリーハウス

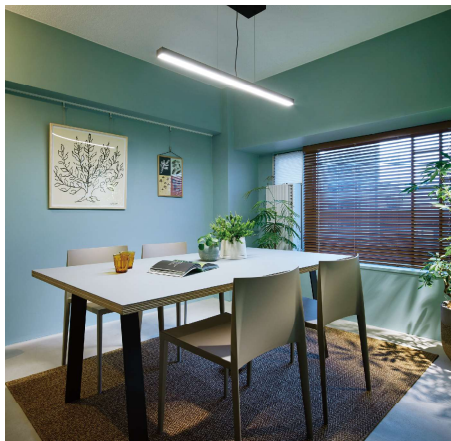
『ギャラリーのような家』

都市の中にある築41年の鉄骨造メゾネット住宅のリノベーション。1～2Fは貸事務所、3～4Fが対象住戸であり、改修前は3Fを民泊施設として活用していたが、新たに夫婦と子供2人の家族向けのプランへと改修した。

日本でよく見かける住戸プランでは、玄関廊下と居室が区画され、家に帰って来ても家族が顔を合わせずに個室に行けることが多いが、これではお互い元気なのかよく分からないということも起こりうる。それに対して今回の計画は3Fの壁を取り払い、鉄骨造の特徴を生かした開放的なリビングアクセス形式の住戸プランとした。家族や来客は必ず3Fの大部屋を通ることになり、お互いの顔が良く見える、風通しの良い平面計画となった。

3Fの大部屋はこの家を訪れる全ての人の目に付くパブリックな場所であるため、収納を充実させてモノを片付けられるとともに、家族の個性が見えるようにモノを飾ることもできる、ギャラリーのような空間が良いのではないかと考えた。白地をつくり、オブジェを置くように黒い什器を配置していった。黒い什器は収納であるが、展示台でもあり、季節に応じて好きなものを飾ることができる。モノクロ空間は、食器やグリーン、ファブリックなど、置かれるモノを美しく引き立てるための背景となる。

所在地	東京都台東区
用途	住宅（リノベーション）
竣工	2022年10月
規模	108.64㎡
構造	鉄骨造
階数	地上3～4階
施工	住環境建設（株）
撮影	Forward Stroke Inc.
掲載	住宅設計.jp、sanwacompany、archello、 建築ジャーナル 2024年10月号、 miratap、住まいのデザイン集 等



大森のアトリエ (Atelier Fuuchi)

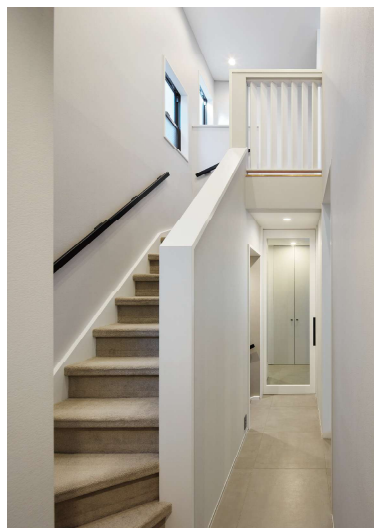
『地層 × グリーン』

東京、大森駅の近くで、築48年（当時）のSOHOビルの一室にランドスケープアーキテクトのアトリエを計画した。計画地の近くには大森貝塚遺跡庭園という公園があり、大森貝塚は「日本考古学発祥の地」と呼ばれている。そのような地歴のある土地で、ランドスケープのアトリエを計画するに当たって、『地層 × グリーン』をコンセプトにデザインを組み立てた。

室内には植物が置かれることから、壁は植物との相性を考慮して、淡いグリーンの水性塗料で仕上げた。床は植物を置いたり、自由な使い方が出来るようにセルフレベリング材仕上げとし、明るく透明感のあるインテリアとした。シナ合板のボックスを積み上げた積層棚など、家具は地層をイメージして積層合板で製作した。積層棚はA4ファイルボックスがぴったり納まる寸法とし、2種類の寸法の棚を、隙間を開けながら積み上げて構成している。デスクの天板は積層合板の上に天然素材のリノリウムを貼った。

元々窓辺には手摺がなく、落下防止のため、窓が開く部分には、梯子状の面格子をデザインし、これも積層合板で製作した。災害時には窓から救助できるように、横にスライドさせて取り外し可能なディテールとした。

所在地	東京都大田区
用途	事務所（リノベーション）
竣工	2022年2月
規模	40.50㎡
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造
階数	地上9階（対象区画）
施工	東協建築（現：RINZ）
撮影	Forward Stroke Inc.
掲載	KJ2022年8月号、 archello、sanwacompany、 建築ジャーナル 2024年10月号等



House M

『共用する二世帯住宅』

築19年（当時）の戸建て住宅のリノベーション。日本で二世帯住宅というと、玄関を2つ備えるなど、居住空間が分離される例も多いが、このプロジェクトでは、元々一世帯向けに設計されている住宅を二世帯住宅に改修するため、共用するものを整理して設計を行った。

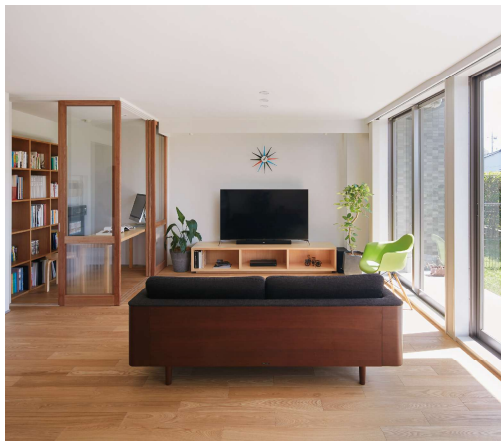
新しい住まい手の家族構成は祖母、夫婦＋子供3人の6人家族である。

まず、1Fで祖母の生活が完結するようIHキッチンを増設した。1Fの浴室は家族全員で共有し、2～3Fは5人家族のスペースとして設計した。数多くの友人が集まる家にしたいとのことから、2Fは一室大空間の広いLDKとした。

生活フロアが違って二世帯家族間の一体感を感じられる住宅を目指し、1Fのダイニングキッチンと2FのLDKは、廊下との間をガラス引戸で仕切り視覚的につなげ、廊下と階段を介して繋がるパブリックエリアと考えて設計した。庭で遊ぶ子供を見ながら、1階ダイニングキッチンで祖母と友人が談笑したり、2階に夫婦友人が集まっている間、子供は1階で遊んだり、二世帯間の境界を曖昧にし、「1.5世帯住宅」とでも呼べる状況を目指した。

クライアントは来客をもてなす家にしたいとのことから、空間のホスピタリティを高めるため、小さなホテルのような空間づくりを行った。パブリックエリアの床はタイル仕上げとし、仕上げ材を連続させることでシームレスでスムーズな空間体験を実現した。

所在地	東京都台東区
用途	戸建住宅（リノベーション）
竣工	2021年12月
規模	146.66㎡
構造	木造
階数	地上3階
施工	NENGO
撮影	Forward Stroke Inc.
掲載	KJ2022年8月号、住宅設計.jp、RenovationDesignVol.2、sanwacompany、archello等



引戸の家

『つながりつつ離れられる家』

築 18 年（当時）のマンション住戸改修プロジェクト。

日本の建築には昔から引戸が多く用いられてきた。日本の建築には縁側空間があり、日本人は雨戸や障子といった引戸を活用し、外部の自然や人との繋がり方をコントロールしながら暮らしてきた。このように外部環境との繋がり方をコントロールする装置を、集合住宅の住戸内でも活用することはできないだろうか？そんな考えから改修プランを検討した。

寝室と廊下間の壁を撤去し、10 枚の連続引戸を挿入した。

引戸は開き戸と違い、開いても閉いても邪魔にならず、少しずつ開け閉めでき、周辺環境との繋がり方を調整することができる。これにより、廊下まで自然採光したり、子供の成長や気分に応じた使い方ができる、自由度の高い空間とした。

施主は子供の様子を見ながら在宅ワークできる環境を希望され、リビングに面してガラス引戸でワークスペースを仕切った。家族の様子を見守りながら引戸の開閉で音の繋がり方を調整できる。

限られた空間でも、そこで過ごす人同士が様々な距離の取り方を選択できる。家で寛ぎ仕事もする、これからの住まいのあり方を実現した。

所在地	千葉県
用途	共同住宅（リノベーション）
竣工	2020 年 7 月
規模	83.78 m ²
構造	RC 造
階数	地上 1 階（対象住戸）
施工	東協建築（現：RINZ）
撮影	Forward Stroke Inc.
受賞	第 39 回住まいのリフォーム 優秀賞、 K-DESIGN AWARD '21 WINNER Award、 A' Design Award '22 IRON Award
掲載	architecturephoto、archello、 月間リフォーム 2023 年 5 月号、 TECTURE、TECTURE MAG、住宅設計.jp 等



Tea-factory

『街に開かれたキッチン』

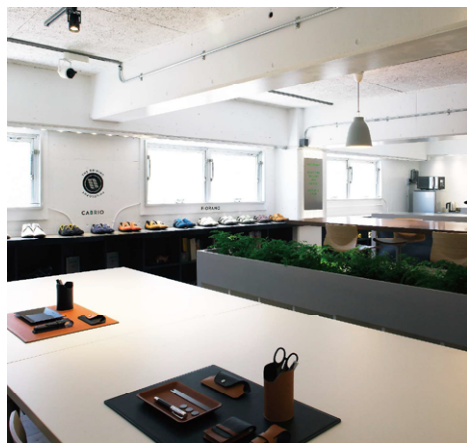
敷地は多くの人で賑わう自由が丘駅前にあり、『魅せる工場』をコンセプトにテイクアウト型店舗における手前と奥の新しい関係の構築を目指した。

通常のテイクアウト型店舗において最も奥に配置されるキッチン你敢えて手前に配置し、通りに対してガラス張りとするこて、お茶を作る様子を街に対してディスプレイ化した。キッチンの窓辺には、今回店舗のために特注製作されたガラス製の給茶マシーンを並べ、通りを歩く歩行者たちの目を楽しませる。

店舗中央のカウンターは、ファサードラインに対して斜めに配置し、長さを最長化した。建物の軸によらない斜めのカウンター配置は客と店員のインターフェイスを最大化し、コミュニケーションを取りやすくすると共に、街に対してアピールできる要素となった。また、カウンター腰壁は鏡面張りとするこて、中と外の風景を互いに写し出し、外部空間を内部に取り込むことを意図している。客用スペースは外部空間の延長と捉え、床仕上げをコンクリート平板とし、街歩きをしながら立ち寄りやすい雰囲気を出した。

キッチンディスプレイ化し、外部空間の延長として内部空間を作りこむこて、『街に開かれたキッチン』を実現した。

所在地	東京都目黒区
用途	物販店舗
竣工	2019 年
規模	39 m ²
構造	RC 造
階数	地上 3 階／地下 1 階（当店 1 階）
施工	Shin@
撮影	TOLUHITO



Negrone River-side Factory & Office

『工場とショールームの融合』

ドライビングシューズ工場の移転に伴う内装改修プロジェクト。敷地は隅田川のほとりの工場地帯にある。ここでは、生産されるプロダクトだけでなく、職人の手作業で製作される行程自体も情報発信するため、工場、ショールーム、オフィスが有機的に関係し合うファクトリー施設を創造する事が求められた。

2階のオフィス兼ショールームは、窓を介して1階の工場とコミュニケーションを取ることができ、また、外周をカウンターで囲みつつ、梁下にキャビネットやハイカウンターを配置する事で、執務スペース、打合せスペース、エントランスを緩やかに分節し、居心地の良い距離感を生んだ。

外周のカウンター天板は凹凸のあるOSB材をグレーに塗り、厚さ6cmの見付けにハードカーボンを張る事で、ドライビングシューズブランドのアイデンティティを表現した。このカウンターは商品を陳列するギャラリーとなり、商品を眺めながら打合せを行うことができる。

工場併設のショールームを計画した事で、来訪者がモノづくりの現場を気軽に見学できる施設となり、下町の工場街に新たな人の流れを生むことができた。

所在地	東京都荒川区
用途	工場、オフィス兼ショールーム
竣工	2014年
規模	235 m ²
構造	RC造、一部S造
階数	地上2階
設計	鈴木将記 + 皆川拓
施工	上原工作所
撮影	池内功和